

# 金沢美術工芸大学所蔵 曾我二直菴印「架鷹図屏風」予備調査

Preliminary Reserch on Soga Nichokuan“Kayouzu-Byoubu”  
in Kanazawa College of Art Collection

佐 藤 一 郎  
SATO Ichiro

## はじめに

2016年春、荒木恵信さんより、曾我二直菴筆と思われる「架鷹図屏風」が金沢美術工芸大学に保管されており、調査を行いたいと思っているので、わたくしに協力の依頼があった。

その後、すぐに「架鷹図屏風」を観察できなかった。損傷がかなり進行しており、とくに虫害が著しいので、燻蒸し、石川県文化財保存修復協会に、作品の現状を調査してもらうということであった。

その結果、2017年1月下旬、曾我二直菴筆と伝えられるその「架鷹図屏風」を観察することができた。荒木さんと二人で、おおよそ2時間ほど実地に観察ができた。近い将来の高精細デジタル写真資料作成を予測し、手持ちのデジタルカメラRX1Rでその六

曲一双の各部分を撮影した。一つの扇全体を撮影することはできなかったので、主に近接撮影を行った。その場で、荒木さんから「佐藤さんの所見を文章にしていきたい」と依頼を受けた。

2017年2月下旬、二回目の調査観察を行い、その際三脚を使い、側光線合成写真作成のために、通常光写真と側光線写真を同じ画角で撮影した。さらに、紫外線電灯を当てて、蛍光反応を観察した。

## 石川県文化財保存修復協会の作品調書

2016年10月に、石川県文化財保存修復工房によって、当「架鷹図屏風」の作品調書が作成されている。冒頭で、名称、作者、有者、法量、形態、貝数、年記が記載され、そして本体と保存箱の形状品質が、続



図1 右隻第4扇(B4)部分 通常光写真

虫喰いの状態がさまざま異なっている。同時に、新聞紙が貼り付いている。「昭和34年(1959年)2月2日 月曜日」と読み取れる。(佐藤一郎撮影)



図2 左方：角金具 右方：散鉋

合掌縁には、金具が打ち付けられている。いずれも錆金具(かざりかなぐ)である。(石川県文化財保存修復工房撮影)

いて、本体と保存箱の損傷状態が述べられている。

そして、左隻全体の表面の法量（本紙、下地、太縁、小縁、全体）と、裏面の法量（貼り合わせの和紙寸法）が記載され、1 扇から 6 扇の法量（本紙寸法）と損傷状態（虫損、補修紙、新聞紙付着、擦れ、欠損、補彩他）が各扇の画像に記入されている。右隻についても同様である。A 4 版大 18 頁にわたる調書である。さらに、各扇の全体、部分を含む多数の画像資料データが作成されている。

別途、2017 年 1 月に、石川県文化財保存修復工房から、本紙の紙質調査結果が報告されている。

## 予備調査の結果

2017 年 1 月下旬の初見時、蝶番がすべて破損している扇も多く、屏風絵として設置しえない状態であった。さらに、虫損が著しく、今後予測される保存修復作業には、労力と費用と時間が必要であろうと判断された。それゆえ、画像データとともに、現状状態をできる限り精確に記録しなければならないとの感想を持った。一方、作品そのものの魅力に惹かれた。水墨画の濃淡に基盤がありながらも、彩色が施され、描き手の工夫が随所に見受けられる作品であるとの印象を受けた。

**損傷状況：**水染み、擦過傷、線傷などの損傷があり、

それらの長年の経年変化による損傷に対して、かなり昔日の時期に何回かの修復処置が行われているように観察される。その際、補修紙の充填、淡褐色による補彩などが行われている。その結果、損傷、破損箇所の修復処置は、六曲一双の各扇に多数見受けられる。

石川県文化財保存修復工房の作品調書では、「大縁の裂が右隻、左隻とも、上と下では隅の処理の仕方が違っている。通常、一つの屏風の中では、隅の処理は同じである。これは、過去の修理時に裂地を再使用して裂地を再使用して裂地が少し短くなったためではないかと思われる。」と記載がある。過去、修復処置が行われた状況証拠の一つであろう。

現状を観察すると、新聞紙の残欠が貼り付いている。扇面同士を閉じる際、新聞紙が挟み込まれ、保管されていたのであろう。例えば、右隻第 4 扇（B 4）の残欠に新聞紙が貼り付いている。「昭和 34 年（1959 年）2 月 2 日 月曜日」と読み取れる。（図 1）。その期日以降、2016 年度の燻蒸時期まで、保存箱保管中に虫害が進行していたと推測される。とくに虫損が著しいのは、折り畳んで保存箱に保管していた際の底辺下部である。本紙、新聞紙だけでなく、下貼り（骨縛り、蓑貼り、蓑押さえ、袋貼り）全体、棧木表面にまで虫損が到達している箇所もある。虫喰



図 3 右隻第 6 扇（B 6）の裏面 通常光写真  
格子状骨（横木）と木枠（縦木）の奥に、骨縛りに反古紙が、蓑貼りに墨を塗った和紙が見える。（石川県文化財保存修復工房撮影）

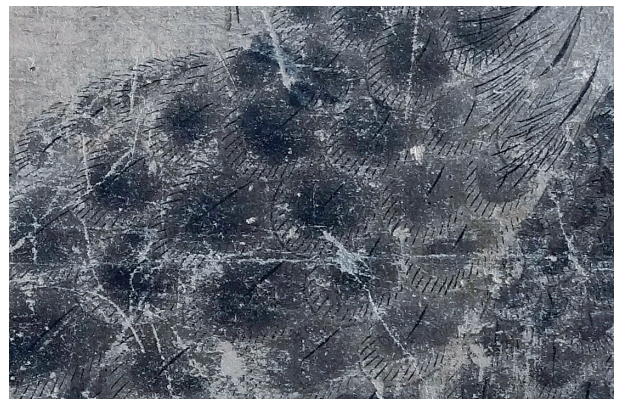


図 4 左隻第 1 扇（A 1）部分 通常光写真  
大鷹の翼羽の羽毛の輪郭線は、細く淡く、それに囲まれた濃色には量しが入る。その真ん中に走る墨線は濃く鋭い。（佐藤一郎撮影）



い跡は、袋貼り和紙の白色が見える場合と、さらに下層まで虫喰いが進行すると、黒色に見える部分も多数ある。蓑貼りの和紙に全面墨が塗布されていたのだろう。

「架鷹図屏風」の形状：六曲一双であり、右隻第6扇の外寸寸法は、堅椽<sup>たてぶち</sup>176.4cm、上椽64.2cmである。堅椽寸法は、5尺8寸(175.75cm)に相当し、屏風絵の標準的な高さである。この黒漆塗りの合掌椽は、第1扇、第6扇に、中小椽<sup>なかこぶち</sup>(上椽、下椽)は、第2扇から第5扇に取り付けられ、合掌縁<sup>かざりかなぐすみ</sup>には、鍔金具(角金具、散鉾)が打ち付けられている(図2)。合掌椽、中小椽の幅寸法は、1.9-2.0cmである。

四方の外枠と内側の格子状骨を組み合わせた木枠には、通常、蝶番、骨縛り、蓑貼り、蓑押さえ、袋貼り(清貼り)などが行われ、このような和紙の下貼りによって下地が成立する。骨縛りには、反古紙が、蓑貼りには、全面および部分に墨を塗った和紙が使用されている(図3)。袋貼りの表面は平滑であり、白色絵具(白土)が漉きこまれている可能性がある。本作品の下地寸法は、縦172.3-173.0cm、横62.3cmである。

下地の縁には、大縁<sup>へり</sup>、小縁<sup>おおべり</sup>と呼称される布地が貼られ、装飾される。本作品の大縁は、幅5.5~5.55cm、小縁は、0.6cmである(図4)。大縁、小縁と、本紙の隙間には、金泥紙が継ぎ貼りされ、その上に本紙が



図5 左隻第2扇(A2)部分 通常光写真

架木の背後の尾羽は淡い調子であり、胴体との前後関係が強調される。空気遠近法を応用したような、柔らかな繊細な墨色の諧調(グラデーション)が醸し出される。(佐藤一郎撮影)

貼り込まれている。本紙寸法は、縦128.3-128.6cm、横51.5-51.9cmである。和紙は竹紙であるとの調査が作成されている。

裏紙も、表側と同じように、骨縛り、蓑貼り、蓑押さえ、袋貼りといった一連の下貼りが行われ、さらに最上層に青色に染められた和紙が継ぎ貼りされている。第1扇と第6扇の裏面の青色は退色して、灰青色に見える。

「架鷹図屏風」の構図：左隻、右隻の各扇には、一羽ずつ大鷹<sup>おおたか</sup>が画面下からほぼ3分1に位置する架木<sup>ほこぎ</sup>に止まっている。座して鑑賞すると、それぞれの大鷹の細部がよく観察できるように、ほぼ視高の位置に横一列に並ぶ。

左隻の大鷹6羽はすべて体幹が画面右方を向いている。頭部はすべて横向きであり、第3扇、第4扇の頭部は、画面右方を向いている。第5扇は白い大鷹であり、第1扇、第6扇は幼鳥に思われる。第2扇は、成鳥になりかけた幼鳥と思われる。

左隻とは反対に、右隻の大鷹6羽はすべて体幹が画面左方を向いている。第2扇を除いて、頭部はすべて画面左方を向いている。第3扇は、幼鳥であり、その他の扇は成鳥が描かれている。右隻第5扇は、胸の羽毛も濃色であり、全身黒色に見え、左隻第5扇の白色と対照をなす。

さまざまな色調の組紐による大緒は、それぞれ二



図6 右隻第3扇(B3)部分 通常光写真

組紐の紐房にはたっぷりと辰砂が塗られ、その下部には垂らすような点描が多数描きこまれている。実際はありえないが、房の揺れの動きを暗示しているようである。(佐藤一郎撮影)

本が各扇に配されており、12扇すべて同じ配色の組み合わせがない。12羽の大鷹のアイデンティティを、それぞれ二本の大緒の組合せが象徴している。

なお、左隻の印章は6扇すべてが画面左下隅に押印されている（図10）。反対に、右隻の印章は、すべて画面右下隅に押印されている。

「架鷹図屏風」の絵画材料、絵画技術：竹紙である本紙に描かれている「架鷹図」は、基本的に水墨画の手法で形態が墨で描かれているが、大緒、留具などは、部分的に彩色が行われ、白眼、羽毛などにも部分的に白色も使用されている。

水墨による筆致は多種多様であり、筆に含まれる墨汁の濃度、分量が、描く部分によって異なる。たとえば、翼羽の場合、羽毛一つ一つの輪郭線は、細く淡く、それに囲まれた濃色はたっぷりと乗せられ、暈しが入る。その真ん中にくる墨線は濃い（図4、14）。架木の背後に尾羽が見えると、一段と落差のついた淡い調子になっており、前後関係が強調されている（図5、14）。極端に言えば、「遠景は青味を帯びて弱く見える」という空気遠近法が水墨の濃淡に応用されているといえるかもしれない。描画作業が一段落すると、画面を乾燥させ、その後次の手順が始まっている。総じて、非常に柔らかな繊細な墨色の諧調が醸し出されているといえよう。

大緒の輪郭線である墨線は、いわゆる鉄線描であ

り、一定の線幅でゆっくりと長く、組紐の流れに沿って引かれている。見た目に、赤色の大緒には、おそらく硫化水銀である辰砂がたっぷりと塗られている。その上に、鉛丹で組紐の一本一本が厚塗りで描入れられている。大緒の先端の房には、近接した下部に垂らすような点描が多数描きこまれている。実際はありえないが、房の揺れの動きを暗示しているようである（図6、13）。青色の大緒には、花紺青が辰砂と同じようにたっぷりと塗られている。白色の大緒、脚足には、2種類の白色顔料が使用されている。今後の顔料分析が待たれる。

いわゆる西洋近代絵画における写生とは異なるが、よく日常的に長年鷹匠のもとで、さまざまな成鳥時期の羽毛の状態、羽の広げ方、啄む姿勢などの観察が行き届いていて、絵師の脳裏にイメージが刻印されている。そのような脳裏に刻まれたイメージをシステム化された描画手順に置き換えている。

今回注目した絵画技術とは、本紙の白色が基調色となる通常的水墨画と異なり、淡褐色が画面全体を覆っていることである。西欧絵画における地透層（インプリマトゥーラImprimatura）と同様の操作が行われている。この全面に施された淡褐色は、中間調子を形成し、その結果白色による描写が効果的に浮き出るようになっている。たとえば、眼球の白眼に白色が塗られ、黒目の墨色との対照が際立ち、猛禽類の眼球の鋭さが強調される（図7）。その結果、



図7 右隻第6扇(B6)部分 通常光写真

全面の淡褐色は、中間調子（ハーフトーン）を形成し、その結果白色による白眼が浮き出て、黒目の墨色との対照が際立ち、猛禽類の眼球の鋭さが強調される。（佐藤一郎撮影）



図8 右隻第4扇(B4)部分 通常光写真

脚足には、2種類の白色顔料が使用されていると思われる。紫外線灯を当てると、紫外線蛍光反応がまったく異なるので、今後の顔料分析が待たれる。（佐藤一郎撮影）



鑑賞者は、まず大鷹の眼球に引き込まれる。

次に、爪を伴った脚足にも、白色が使用され、全体の中で視覚に入ってくる。近づいて見ると、爬虫類と近似している足のボツボツが、どろっとした絵具を垂らしてできたように凸面に浮き上がっている。白色に塗っている絵具と凸面の厚塗りの白色絵具は、異なる顔料が使用されている。紫外線を当てると、蛍光反応が異なるからである。染料系の絵具が使用された可能性も残る（図8、11、12）。

左隻第5扇の白色の羽毛は、画面全体を覆う淡褐色との明度差が効果的に生きている。上層の白色薄塗りを透過して、下層の淡褐色がほのかに見えてくる乳白色効果が美しい。さらに、このような半透明な薄塗りの白色と、その上に重ねられた不透明な厚塗りの白色との調和も的確である（図9）。

（さとう・いちろう

大学院／油画実技・絵画材料学・絵画技術学）

（2017年11月7日 受理）

「架鷹図屏風」左隻

A 6 左隻第6扇

A 5 左隻第5扇

A 4 左隻第4扇

■ 部分…虫損  
 ■ 部分…新聞紙付着  
 ■ 部分…補修紙



図9 左隻第5扇(A 5)部分 通常光写真

羽毛の白色は、画面全体の淡褐色との明度差によってが浮き出る。透過して、淡褐色がほのかに見え、乳白色が美しい。その上層の不透明な厚塗りの白色とも調和している。(佐藤一郎撮影)

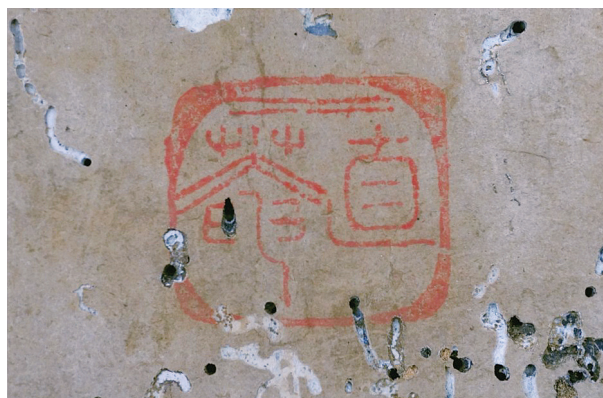


図10 左隻第5扇(A 5) 通常光写真

左隻の印章は6扇すべてが画面左下隅に押印されている。反対に、右隻の印章は、すべて画面右下隅に押印されている。(佐藤一郎撮影)



A 3 左隻第3扇

A 2 左隻第2扇

A 1 左隻第1扇



図11 左隻第5扇(A 5)部分 通常光写真

白色が脚足薄く塗られ、輪郭線が引かれ、別の白色がどろっと垂らして塗られている。虫喰いによって、骨縛り反古紙が、その奥に衰みの貼りに墨を塗った和紙が見える。(佐藤一郎撮影)

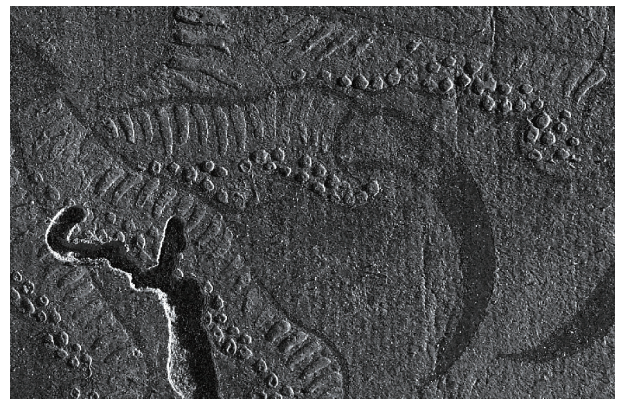


図12 左隻第5扇(A 5)部分 側光線合成写真

垂らすような点状の厚塗りが、凸面に浮き上がる。奥行きも含めて、虫喰いの進行状態が視覚的によく理解できる。本紙和紙の質の子の漉き跡も見える。(佐藤一郎撮影、作成)



「架鷹図屏風」右隻

B 6 右隻第6扇

B 5 右隻第5扇

B 4 右隻第4扇

■ 部分…虫損  
■ 部分…新聞紙付着  
■ 部分…補修紙



図13 右隻第1扇(B 1)部分 通常光写真

淡青色の大緒は、染料系の色材、例えば藍のように見える。撚り糸による紐の膨らみも感じさせる。羽ばたく大鷹の動勢によって、揺れているかのようである。揺れに伴う大緒房の穂先を暗示する点描も軽やかである。おのずと、輪郭線の線描も軽やかで細いが、洒脱で、抑揚が利いている。(佐藤一郎撮影)



B 3 右隻第3扇

B 2 右隻第2扇

B 1 右隻第1扇



図14 右隻第1扇(B 1)部分 側光線写真

羽ばたいている瞬間の大鷹の胸羽と背羽の形状描写である。さまざまな太さと抑揚のある線描であり、軽妙な筆致である。諧調（グラデーション）の幅も広く、墨の濃淡が何種類もある。側光線写真では、表面の擦れ跡、虫喰いも比較的明瞭に見てとれる。（佐藤一郎撮影）

